

# 字の無い日記

「若い時からの日記があったなら、もっと潤いのあるいい作品が書けたであろう」とある高名な作家が言ったそうです。その人にしては、ましてわれわれにとっては日記を書き続ける事は至難の業であります。

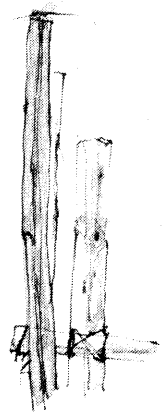
母が日記帳を買ってくれる、自分も今年こそはと決心します。しかし文字通りの三日坊主か、一月も続けばいい方でした。楽しい夏休みも終りごろになると次第に頭が痛くなってくる。たくさんたまった宿題の日記をまとめて書かねばならなかったからです。一口に言えば飽きっぽい性質だったからです。飽きるにはいろいろ理由があります。その一つはあまりにも詳しくあれもこれも書こうとしたからです。朝六時二十五分ごろ目が覚めた。顔を洗ってからお餅を焼くのを手伝った。七時三十分ごろに……” などと元旦には大張切りで書き始める、こんな事

では誰にも続けられるわけは無い。もう一つ、これが最大の理由ですが、今日は暇がないから明日まとめて書こう” という事。それやこれやで書かない日の方が多くなり、いや気がさしてやめてしまうという事になります。

こんなずぼらな私でも、今では胸のポケットに小さな手帳を入れて、これに予定を書き込まなければ暮らしていけません。これに新たな予定を書くついでにその日のおもな出来事をメモしておけば、記録としては充分です。

多くのお母さんは必要に迫られて家計簿をつけています。行事には出費を伴う事が多いから、これさえあればいいながあったかが正確にわかる。中には、”今日の出来事” という欄があるものもあります。無くてもたたくさんの余白があるから、そこに、”坊やのはしが治って今日から幼稚園に行き始めた” とか、

降  
矢  
震



ついでに書き込んでおけば記録としての日記を別に書かないでもすみます。この「ついでに」書く事なら誰にでもできる。改めて日記帳を取り出し、「さあこれから書こう」などと力むから無理が出て長続きしません。なつかしい思い出としての日記なら不完全さを気にする事はありません。特に子どもの場合は予定や家計簿を書く必要が無いのだから、日記を書き続けるのは大変むずかしい事になります。思い出を残しておくためなら別に方法があります。後に記す「字の無い日記」はその一つで、これならどんな三日坊主でも何かのついでに作れます。以下これを作るに至ったいきさつと方法について記してみます。

「なつかしい思い出などと言うのは一種の老化現象である。私は過去を振り返らない事になっている。もちろん日記など書かない」と言つて、身のまわりに余計なものを一切置かず、実にはすがすがしい生活をしている人がいます。こう徹底する事ができれば大変幸いなのですが、凡人には中々むずかしい。私など、幼稚園で書いた図画や小学校以来の成績品、教科書、手紙の束や写真帳、旅先で買った郷土人形の数々、苦心して集めた標本類が押入れにいっぱい詰め込んであります。しかし戦後こうした物を保存するのをやめようと考えました。空襲でこれらすべて焼失してしまったからでもなく、前記の人のように悟つたからでもありません。物に執着する事がいかに恐ろしいかを

まざまざと見せつけられたからです。

あの三月十日、私はたまたま日本橋の病院にいました。とてもいけない、と逃げ出した時はもちろんから身です。近くに二月の爆撃の跡の雪解け水の溜りがあり、おかげで私たちは助かりましたが、大きな荷物にしがみついて焼け死んでいく人がたくさんいた。「荷物を捨ててここに入れ」と言われても大荷物を離さない。もし私とその時自分の家から避難していたのなら、やはり大きな荷物をかかえて死んでいたでしょう。

しかし凡人の悲しさ、時がたつにつれて捨て難いものが少しずつ増えていく。写真を自分でとる事はやめたが、記念撮影の機会はある。肉親や友人からの手紙は中々捨てきれないものです。空襲の時の事は忘れてはいないから、なるべくかさ張らぬように気を付けてはいるものの、十五年もたつと段ボール箱に三つもたまってしまいました。日付順に紙袋に入れてあるだけです。それから体積は極小におさえられています。見るには大変不便です。また出したり入れたりする度に折れたりしわになるものが増えています。そこでこれらのうちから貼れるものをより出してアルバムのような形にまとめる事にしました。

写真アルバムだと台紙が厚くて体積が大きくなり過ぎます。市販のスクラップは紙が茶色ハトロン紙で見えしなないし、紙が薄過ぎ、またとじ方が再整理に適しません。そこで心持ち厚

目な白紙のルーブリーフ、A4版と決めました。今ではこれを更にポリエチレン袋をとじたホルダーに入れていきます。よくない事、はがれにくい事、ハガキのように両面見たい物や手紙、論文別刷のような小冊子等は貼り付けずにただはさみ込めばよいので大変便利です。また未整理のものも、日付順にこの中にに入れていけば、別に紙袋に入れる必要ありません。

旅行の記録を帰った後で書く事は中々むずかしい。夜、あちこちに便りをするついでに絵ハガキの通信欄に簡単にメモするぐらいは誰にでもできます。宿の領収書の余白に、帰りの車中でいろいろ書き込むというでもあります。宿の名、地名から年月日その他いろいろの記載がすでにあるから、自分で書く分はごくわずかですみます。遊覧バスの記念乗車券には回遊先の道順が図示されているものもあり、多くは日付印がおしてあるから、自分で何も書く必要が無いくらいです。

同窓会や送別会の通知ハガキの余白に何か書き込む。通知状が無いとか大き過ぎる時には宴会場の名入りの箸の袋やマッチの箱にメモするのも中々面白いものです。見て楽しむものから、こういった工夫をする。押し花などもその一つです。生まれて初めて踏んだ外国の地、ハワイの空港でサーピス嬢が胸に付けてくれた小さな蘭、氷河の傍に咲いていた雑草、いずれも旅先の事ゆえ手帳に挟んだだけの不出来のものです。記念

としては充分です。ブドー酒の瓶の鉛の口金を平らにして貼り込んだのもあります。

多勢での旅行のあとを、それぞれがとった写真を集め、希望のものを注文する事が多い。直後は印象が生々しいからつくさん申し込むという事になります。後になってその中からただ一枚だけこの「字の無い日記」のために選ぶという事になると、結局は代表的な風景を背にした全員揃った記念撮影が良いという事になります。あとは普通の写真アルバムに貼ればよい。写すのは若い人が多く、どうもこうした野暮ったいものは撮りたがらないし、また努力しないとそういった機会が無いものです。そこで年上の私などが「せめて一枚くらいは全員でとろうよ」とすすめる。自由を束縛されてブツブツ言うのもいるが、後に希望者をつのればほとんど全員が申し込んでいる。結局は年の老若にかかわらず思いは同じらしいです。

案内所でくれるパンフレット、特に県庁や市役所が腕によりをかけて作ったものには素晴らしい印刷のものがあります。これ全体をはさんでもよいが、この中から自分自身で実際に見た風景なり建物だけを切り抜いて貼るのも良いものです。なまじか絵葉書や写真よりも美しいし、第一アートペーパーだから厚くなりません。最近では「風景タバコ」というのが売られています。これも全体に変化を与えるし、厚くもなりません。

あとになって見ると、何でこんなものを貼ったのか、とバカバカしくなるものもあり、反対に当時は何気なく捨てたものが後には意味を持ってくるものもあります。先年本の間からしおり代りの古い紙片が出てきました。昭和二十三年十一月の俸給の内訳書です。日付から察すると、無給副手から有給になった最初のものでした。青と赤のインクで書かれたきわめてわずかな金額は、当時のインフレをまざまざと思い出させるものでもあり、早速貼り込んだのは言うまでもありません。

手紙、ハガキ等はある意味では「人が書いてくれた日記」でもあります。なつかしい思い出というだけでなく、自分に関したさまざまな行事が記されており、友人との手紙から当時の自分の考え方、行動を間接に知る事ができます。

要するに私の「字の無い日記」は、普通の日を追って自分で字で書き綴った日記ではないという意味です。印刷され、あるいは人の書いた字のほかに自分で書き込んだメモもたくさんあります。まざままの材料さえあれば、一月後でも、五十年たつてからでも、いつでも作れます。普通の日記は、後にまとめて書く事はむずかしいが、これの整理は時がたつほどよくなる。ルーズリーフを使っているから、思い付いた時、暇な時に気楽に貼り直しができます。時として追加するものもあるが、全体としては再整理することに濃縮されていきます。

ホルダーそのものがわずかにセンチの厚さですから、二十葉の白リーフ表裏に貼り込んだものを挿し入れても三センチを超える事はありません。現在三十冊ぐらひありますが、その幅は一メートルにおさまります。中には無用のものもたくさんありますので整理すればこの半分ぐらひにはなるでしょう。

右の「字の無い日記」そのものの形は、一種のアルバム、スクラップブックにすぎません。違う点は、大きな免状とかメダルのようなこの中に納まらない物は別にして、自分の思い出がこの中に全部濃縮されている事であり、ある人が「君がもしロビンソン・クルーソーのような孤独な生活をせねばならぬとしたら、一番ほしい物は何か」と聞かれたら、即座に「エンサイクロペジア・ブリタニカ」と答えたそうです。現在の私も同じように問われたなら「この「字の無い日記」です」と答えるでしょう。

この「字の無い日記」は「自分だけで見るアルバム」ですから、私が死ねば無用になります。せがれや娘は、自分の写っている写真ぐらひを残して他は処分してしまうでしょう。しかし、もしこれらを保存し、通覧するならば、この親父の戦後からの全生活と、そのすごした時代の背景をも知る事ができるはずですよ。

残念ながらこの「日記」は後になって出て来たわずかなもの

を除いて戦前の分はありません。もしあったとしたならば、その分の資料だけを紙袋に整理すれば、ふるしき包につくらしい、リーフに貼っても案に一回で運べる量になるでしょう。しかし実際にはあまりにも多くの品々をしまつて置き過ぎました。三月から私の家が焼けた五月の末までに何回も郷里に帰っているのですが、何一つ持って行かなかつた。そのように大量の物を整理する気力も無い。すべてを放棄しようという心理状態にならざるを得ませんでした。

「必要にして充分な最小の量」という心得はすべての生活において必要な事です。空襲や火事等は例外ですが、この住宅事情、転勤等のためのたびたびの引越し。私たちの学会での講演も、予鈴と本鈴できわめて短時間に制限され、その中に必要にして充分な内容を述べねばなりません。三十分も祝辞をぶち続け、司会者を困らせる長老たちの育つたような「旧きよき時代」は去つたのです。この事はおとただけでなく子どももその例外とはなり得ぬ時代になってきたようです。

子どもは親に似ると言います。うちのせがれの引き出しの中は、図画や、スタンプをおした紙片、クレヨン、ドングリ、蟬の抜け殻等が雑居してまるでバタ屋の籠です。自分の所では置き切れず、家内の棚まで占領しつつあります。何とかして「必要にして充分な最小の量」の考えを教えようと考えたが、これは

無理のようです。私自身二十歳過ぎてから、空襲という特殊な体験から初めて気が付いたのですから。夏休みの日記に苦しむあたりも、四十年前の自分の姿を見るようです。去年の夏、この「日記」方式を教えた所、大変気に入つたようで、あれこれベタベタと貼り付けていました。こうした事から整理する習慣がつけばいいと、大いに奨励しようかと思いましたが。反面、子どものころから「なつかしい思い出」などと考える事は病的のような氣もします。幼児教育の専門家にお聞きしたい所です。

せがれも年を取つてから親父の「日記」のようなものを作りたいと思うかもしれません。今いらな思つても、後になつてあればよかつたと思うような物は大体見当はつきます。こういった物も、わずかずつではありますがいでにいろいろとメモして、この「日記」にはさんであります。

深夜、仕事に疲れて一服する時、この「日記」を取り出して見てみますと、何となく気分がしずまるような氣がします。そうした時、始めに書いた作家とは別の意味で「もし幼時からの分が揃つていたら、よりなつかしい思い出となつたであろう」と思うのです。

(千葉大学病院)